

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	Zulhamsyah Imran															
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当																	
<p>論 文 題 目</p> <p>Integrated Sustainable Livelihood Approach toward the Strengthening of Social Resilience: A Case Study on Recovery of Fisheries Livelihood after the Tsunami in Krueng Raya Bay, Aceh-Indonesia</p> <p>(社会回復力の強化に向けた統合的かつ持続的な生計アプローチ：インドネシア・アチェ州、クルングラヤ湾における津波後の水産業復興に関する事例研究)</p>																		
<p>論文審査担当者</p> <table border="0"> <tr> <td>主 査</td> <td>教 授</td> <td>山 尾 政 博</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>〃</td> <td>田 中 秀 樹</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>河 合 幸一郎</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>細 野 賢 治</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>〃</td> <td>矢 野 泉</td> </tr> </table>				主 査	教 授	山 尾 政 博	審査委員	〃	田 中 秀 樹	審査委員	教 授	河 合 幸一郎	審査委員	准教授	細 野 賢 治	審査委員	〃	矢 野 泉
主 査	教 授	山 尾 政 博																
審査委員	〃	田 中 秀 樹																
審査委員	教 授	河 合 幸一郎																
審査委員	准教授	細 野 賢 治																
審査委員	〃	矢 野 泉																
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、2004年12月に発生したスマトラ沖地震・インド洋大津波で被災したインドネシア・アチェ州、クルングラヤ湾における津波後の水産業復興に関する事例研究をもとにした、社会回復力の強化に向けた統合的かつ持続的な生計戦略の有効性に関する研究である。被災したアチェ州の沿岸漁村では住民の貧困化が急速に進み、社会全体の脆弱性が増した。さまざまな復興活動が企画・実施されたが、漁業に関する生計活動の改善と持続的な水産資源の利用に関する活動が重要視された。統合的な生計向上アプローチによって貧困削減を実施し、社会回復力(social resilience)を強化することが復興にとって必要である。本論文の課題は、1) 漁村における漁業生計パターンを変化させる要因を分析する、2) 漁業を中心とした生計に直接に影響を与えるアンチョビー資源を減少させ、沿岸域生態系を悪化させた要因を明らかにする、3) 参加型の持続的生計アプローチの効果を分析する、4) 漁村の伝統的組織が復興過程と生計向上の分野で果たした役割を明らかにする、5) 漁業生計の復興に効果的に適応できる枠組みを明らかにし、社会回復力を高める道筋を提起する、以上の5つである。</p> <p>本論文は8章から構成されている。第1章では、スマトラ沖地震・インド洋大津波で被災した沿岸漁村が置かれた社会経済的状況が述べられ、問題意識、課題、目的、分析の枠組みが明らかにされた。第2章では、持続的な生計アプローチに関する先行研究の整理がなされた。社会回復力が定義され、論点の整理がなされた。第3章では、事例研究の対象地であるクルングラヤ湾が紹介され、データー及び各種関係資料の収集、その分析手法などが明らかにされた。</p> <p>第4章では、クルングラヤ湾岸の漁村における生計の変化と、それを引き起こした要因の分析がなされた。津波災害によって受けた経済的かつ社会的損失が明らかにされ、復興過程において生計活動がどのように回復したかが述べられた。水産資源の変動と、及び漁</p>																		

業経営に関する費用支出が変化を引き起こす要因であった。**第5章**では、クルングラヤ湾の漁村経済にとって重要なアンチョビー資源の動向について分析した。津波被災以前から敷き網漁による漁獲が盛んであったが、MSY等の推計からすでにアンチョビー資源は過剰漁獲の状態にあった。津波による影響、更に敷き網漁の急速な復興がこの資源の持続的再生産を妨げた。その結果、調査時点では、敷き網漁船数が急激に減少し、地域漁業の構造が大きく変化していた。**第6章**では、復興過程における、漁業生計を中心にした持続的な生計アプローチが果たした役割について分析した。津波被災後に貧困率が急激に上昇したが、さまざまなプロジェクト活動を実施することにより社会的脆弱性の解消が進んだ。特に代替生計アプローチと社会生態アプローチの有効性が確認された。**第7章**では、社会資本の回復と伝統的な漁民組織が果たした役割について明らかにした。パングリマ・ラウトと呼ばれる漁民組織は、本来は資源管理のための組織であるが、地域漁業および漁村社会の復興の取りまとめ役を果たした。在来型の市場流通組織も生計活動の回復をはかる上で重要な役割を担った。社会資本の回復による、社会回復力の強化が図られた。

**第8章**は全体の総括と分析を踏まえた提案である。統合的で持続的な生計アプローチが津波被災から復興する漁村社会においては有効であることが明らかになった。そのことを通じて社会の脆弱性が弱められ、社会回復力が強化される。

本論文は、スマトラ沖地震・インド洋大津波で被災したスマトラ島の漁村社会がいかに復興過程を歩んできたか、どのような手法をとりながら社会回復力を得てきたかを明らかにしたものである。災害に襲われることの多いアジア沿岸域社会の復興事業の在り方を示すものとしても社会的価値が認められる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。